

筑波のかえる



高次脳機能障害友の会・いばらき

2024年 ~~ 第63号 ~~



高次脳機能障害友の会・いばらき

〒302-0102

茨城県守谷市松前台7-22-6

TEL 080-5901-9979

E-mail kojinouibaraki@yahoo.co.jp

H.P <http://nosonshoibaraki.sunnyday.jp/>



《 63 号内容一覧 》

はじめに	1
家族会20周年を迎えて思うこと	2
リハビリ講習会（支援者の皆さんから）	3
交流室が3地域に	4
ボウリング大会・ボッチャ大会	5
がんばってる人	6
拠点病院訪問	
白十字総合病院	7
古河総合病院	8
当事者会・支援センター（新任紹介）	9
お知らせ	10



ボッチャ大会の集合写真



表紙の写真は、那珂市在住の当事者会員、飯塚幸子さんが通所する地域活動支援センターの皆さんで作った作品です。夜空に打ち上げたきれいな花火は、館内の大きな円柱に貼られていました。涼しげな風鈴や折り紙の花は、天井に吊るされていました。幸子さんは7年前に2回目の「がんばってる人」で紹介しました。

7年ぶりにお邪魔しましたが、今も「さっちゃんのストレッチ」は継続しているそうです。

はじめに

「友の会 20 周年を超え、より多くの人に
高次脳機能障害と家族会を知ってもらおう！」



爽やかな秋の風と澄んだ空気の青空に陽光が眩しい今日この頃、
皆さまいかがお過ごしでしょうか。

高次脳機能障害友の会・いばらき（以下、友の会）は今年で 20 周年を迎えました。ひとえに会員や賛助会員、支援関係者のご理解とご協力の賜物と感謝致しております。それを記念し 9 月の茨城県リハビリ講習会で「高次脳機能障害当事者や家族の困りごとについて語り合い考える」と題した家族と事業者のパネルディスカッションを開催しました。活発に意見交換がされ聴講者にも熱心に聞いて頂け、有意義な会となったと自負しております。

この 20 年で環境は大きく変化し、会はゼロ状態から「脳損傷友の会」「高次脳機能障害友の会・いばらき」と名称変更し、交流室の場は筑波大学附属病院からコロナ蔓延期間に土浦ふれあいセンターながみねに移りました。喜ばしいこととして高次脳機能障害支援センターが誕生しました。一方では相談したい方が遠方がゆえに県南での交流室に参加しにくいなどの課題や当事者個人ごとの異なる特性や悩みへの対応の課題も出てきました。

その中で友の会自体も状況に合わせて進化を続けています。今年度の取組みとして、家族会交流室を県央、県南、鹿行の 3 地区で開催する体制とし、各地区の相談者が参加しやすく改善され、今では既に地区ごとに相談者に参加頂いています。また当事者会は、4 年ほどが経過し当事者間の顔の繋がりが生まれ、お互いの話に共鳴しお互いの気付きにも繋がってきています。それに伴い深い悩み事も題材になり、当事者だけでは考える方向づけができない課題が出てきました。そこで今年度から臨床心理士が羅針盤の役割でスーパーバイザーとして加わり、集団療法の場を形成し気付きを得やすい体制としています。

ところで私の紹介ですが、妻が 7 年前にくも膜下出血の後遺症で高次脳障害となり、友の会と出会って疲れた心を癒やしてもらった経験から、次は自分も安心を与える側になりたいと役員となり 5 年経過し、今年度から会長を務めています。今まで同様、よろしくお願い致します。以前、支援センター初代所長の小原様から「恩送り」という言葉を聞き、その後の私の中で大事な言葉となっています。会話によって悩みや不安を分かち合い、厳しい中にも少しの安らかさの中に「温かみ」を感じながら過ごしていけるようになったことに感謝し、次は自分の周りの悩みや不安を抱えている方に温かみの“温”と共に“恩”を送りたいものです。またそれを同じ志の方と共に更に広めて「温と恩送り」していければと思っています。

ここ最近、県福祉課や支援センターの努力で支援体制の整備を実感できるようになりました。ただし未だ国の法整備や一般社会の障害理解は停滞しているように感じます。今後、当事者と家族がより安心して過ごせるようになるためには、一般社会の理解による実質的な社会的市民権を得る必要があるでしょう。高次脳機能障害は見えない障害と言われるほどに周囲が理解できない障害です。今年の前半にはテレビドラマで高次脳機能障害が取り上げられその名称を今まで全く聞いたことがなかった一般の方々にも少しだけ認識が広まりました。理解促進が進めば、見えないことによる誤解が解消され、皆が支援できる障害として当事者と家族の世界が明るく大きく広いものとなるでしょう。そのために当事者とその家族ができることの一つは、自らの体験、日常の実態の話を少しでも勇気を出して発信し続けることです。それが一般社会の理解のためにとっても大事なことであり、未来へ「恩を送る」ことにも繋がるのだと思います。 『みなさんに知ってもらおう高次脳！』（会長：本田孝男）

家族会20周年を迎えて思うこと



いつも見慣れた景色に透明感が加わり秋の到来を感じます。体も気持ちもなんとなくほっとしているこの頃です。

当会は2004年に脳損傷友の会・いばらきとして誕生し、高次脳機能障害友の会・いばらきへ途中改名、いつしか20年目を迎えました。振り返ればやはり20年は長く、この間何と沢山の方々が、茨城県の高次脳機能障害者を取り巻く環境向上のために関わってくださっていたことかと、今更ながらに思い至り感謝の念が膨らみました。

当初から県へ要望し懇談を重ねてきた支援拠点として、2019年に「茨城県高次脳機能障害支援センター」が設立されました。セーター職員の方々の目覚ましいご活躍によって高次脳機能障害が県内に浸透していきました。その成果として、今年度は県内5ブロックに支援拠点病院が設置されることになり支援コーディネーターが配置されています。できるだけ身近な地域ごとの支援活性化につながるのではと期待しております。電話・訪問相談も当事者や家族からの相談件数はずっと右肩上がり続けて、忙しくご対応いただいています。

会の事業である「交流室」は、2013年に開設しました。高次脳機能障害の難解さゆえ周囲に理解されず孤立してしまう辛さをどうにかしたいという切実な体験からの発想でした。交流室会場は、筑波記念病院の斉藤先生やスタッフの方々、その後筑波大学付属病院の石川先生やスタッフの方々のご協力で会議室をお借りし開催していました。現在はコロナの影響により、土浦市ふれあいセーターながみねで開催しています。今年度からは、水戸市内、神栖市内併せて県内3箇所で開催して、年齢を問わず発症する高次脳機能障害に関わる方どなたでもご参加を受けています。また、当事者に関わる事業として「当事者会」を2020年から開催し、受傷以来外出する時にはほとんど付きそう家族とは離れて、別室において当事者同士との交流体験を重ねています。友達との交流が希薄になりがちな当事者達の拠り所にしたと思っています。ここでは高次脳機能障害支援セーター職員、加藤言語聴覚士、笹島臨床心理士にご協力いただいています。

茨城県作業療法士会の中村先生や皆さまには、長い間バス旅行やスポーツ大会、調理会開催などのご協力をいただいています。「リハビリ講習会」は、当初から支援くださっている木犀会木村理事長や職員の方々、山川先生、河野先生、米澤氏に長らくご協力いただいています。初期の頃の集会活動などでは、県立医療大学の鈴木先生や作業療法科の学生さん、それからボランティアの方々、付属病院の医療リハビリの方々にもお世話になりました。また、茨城県リハビリテーション専門職協会ではこの10年間、PT、OT、STの研修会に毎年高次脳機能障害の紹介を取り上げてくださり、家族や当事者が講演を行い療法士の皆さまへ高次脳機能障害についてお伝えすることができています。皆様方、そしてご紹介しきれない程の方々の応援を受けていることに改めまして篤く感謝申し上げます。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

今後もこのような支援のつながりが更に広がり、高次脳機能障害への理解が広がることを願います。そのためには、体験者としての声をあげて様々な方法で発信していくことも家族会の大きな役割かと思います。地道な活動でコツコツと積み上げられたしっかりとした人とのつながりが変化をもたらすことを信じています。

慈恵会医科大学の渡邊修先生の家族への介護負担感実態調査(平成30年調査)でも90%の当事者は家族と暮らしています。介護する主体は母親が60%になります。家族が介護できない状態になった時に、本人に合う生活ができる行先が現実にあるのか・・・本人の生涯にわたって日常生活全般をサポートする体制が早く構築されることを切に願います。

丹羽 真理子

県リハビリ講習会にて



当日は当事者家族と支援者の方々によるパネルディスカッションが行われました。支援者側からご登壇された3名の方から感想を頂きました。

社会福祉法人木犀会 ひまわり館 管理者 弓家 幸枝

今回私からは、ご自宅から通所されていた方のお話をさせていただきました。

高次脳機能障害の症状により気分の調整が難しく、物に強く当たったり、周囲の人に対して暴言があり、気に入らないことがあると『帰る』と言って外に出て行ってしまふ方がいらっしゃいました。気分には大きな波があり、『雨に濡れて不快』、『飲み物の温度が想像と違った』等、周囲からは『そんなことでどうして怒るの?』と思われるようなことでも、激しく苛立っていました。

事業所での対応としましては、その方の体調や気分を周囲が察し、それに合うような活動を提案する等して、ご自身でも気分のコントロールをしやすいように、気持ちの面のフォローをしていきました。“こうじゃないと嫌”という感じで、様々な事に対して『許せる範囲』が狭くなっている場合は、その方が許せる部分から関わりを続け、心穏やかに過ごせる時間を増やしていくことを目指しています。

社会福祉法人木犀会ケアホームスマイル 管理者 西野 都

これまで高齢・障害福祉に携わり、様々な出会いの中で私は、『個々に向き合う』という対人支援の在り方で考えれば高次脳機能障害がある方もその他の障害がある方、または認知症がある方でも関わり方の基本に大きな違いはないと考えています。日々変化するご本人の困りごと、表出された感情、表現など、その日・その瞬間のその方に向き合いトライ＆エラーを繰り返し、時にぶつかりながらチームでサービスを提供することが私たちの仕事だからです。

そんな私が管理者として職員たちに伝えている事は高次脳機能障害が後天的な障害であるという事です。健常と言われる心身状態で社会生活を送り、自立した自由な生活を送り、仕事をし、恋愛をし、友情を築き、家庭を築いてきた方がある日突然、障害者になる。または一家を支えていた大黒柱が、愛するご家族がある日を境に別人のようになってしまう。

支援学校で支援方法や将来の道筋を考える機会も、地域のつながりの中で社会に出る準備の期間があったわけでもなくある日突然、現実と向き合わなければならなくなった。そんな言葉にできない複雑な思いを持った方たちであるという事を根底に持つことが関わり方の大きなヒントになるのではないのでしょうか。

最後になりますが家族会 20 周年、本当におめでとうございます。

我々、支援者の役割として『困りごと』と向き合い、探求し、個々に向き合う力を磨くことで当事者・ご家族が『他人の力に甘えること』が出来るような福祉サービスを提供できるよう微力ながら発信し、職員育成に尽力していきたいと思えます。

つくば市福祉支援センターさくら 地域理学療法認定理学療法士 松本 慎也

当事者やご家族様の困り事は、入所・通所・就労などそれぞれの活動場面で多岐にわたり、様々な社会的障壁を経験していることを実感しました。パネルディスカッションでは、各支援施設事業者の事例から、困り事に対して真摯に向き合うことの大切さを改めて再認識しました。そして、パネリストとフロアの皆様がー丸となり、高次脳機能障害に対する理解や学びを深める姿に、心から感銘を受けました。

今回、ご清聴頂いた皆様から 20 年間変化に乏しい社会的行動障害が改善した事例に対して、多数のご質問を頂きました。この事例においては、支援方法の統一（傾聴とコミュニケーション方法の再学習）、多職種連携（相談支援専門員・他施設）、家族との協働が重要でした。僥越ながら、日々の支援のご参考になれば幸いです。

末筆ではございますが、「高次脳機能障害友の会・いばらき」設立 20 周年誠にありがとうございます。貴会の益々の発展をお祈り申し上げます。

家族会交流室が3地域に



平成25年度につくば市で始まった家族会交流室は、今年度6月より3地区（鹿行・県南・県央）で開催することになりました。自分が暮らす身近な地域で相談や交流、そして情報交換の場が出来たならということで始まりました。会員の皆様との交流をこれからも図って参りたいと考えていますので、振るってのご参加お待ちしております。

県南交流室

日時：偶数月の第2金曜日 午前11時～14時

場所：土浦市ふれあいセンター「ながみね」

6月より隔月開催となりましたが、以前と変わらず有意義な時間になっていると感じます。悩みを抱えて来られる方々も2回3回と続けて来られることに少しずつ笑顔も見られるようになりました。会員の皆さんの「昔は自分もそうだったな」という体験話が、良い時間薬になって効いているように思います。そして、高次脳機能障害支援センターのコーディネーターが参加して下さる事ですぐに繋がることができ、大変心強い支援になっています。

鹿行交流室

日時：奇数月の第4水曜日 午前10時半～12時

場所：神栖市保健・福社会館 相談室

7月の交流室に、高校2年の冬に発症した脳炎による後遺症で困っている方の相談がありました。高校3年4月から通信制に再入学しましたが、周りの理解が得られずトラブルの連続で苦慮されているとのこと。友達と疎遠になったことが一番のダメージで、本人も今の自分を認められないそうです。

突然の出来事で人格が変わったような姿に、家族の驚きと戸惑いは封印していました。わかってもらえない怒り、悔しさが思い出され、当時の我が家と重なり、胸が熱くなりました。

県央交流室

日時：奇数月の第2週金曜日 午前10時～12時

場所：水戸市社会福祉センター（ミオス）

「県央交流室」は、今まで「県北集会」の名称で実施していた場所を継続して使用することになりました。常磐線赤塚駅から歩いて直ぐの所で、交通機関を利用する方にはとても便利です。

記念すべき第1回目は7月12日でした。初回でもあり、まだ会員にも衆知されていないことも予測されましたが、役員が何人か駆けつけてくれました。ほかの交流室同様、毎回支援センターからも参加して下さることになっています。2回目の9月13日には、相談者2組の他に新聞の取材で茨城新聞社の斎藤記者も来室されました。

ボウリング大会

期日：2024年7月14日（土） 場所 パニックボウル（土浦市）

昨年度実施して、大変好評だった「ボウリング大会」を、今年度も実施しました。昨年度は竜ヶ崎で少し遠かったのが、今年は土浦になりました。

そこで、思わぬハプニングが……。何と、パニックボウルには「エレベーター」がありません。ボウリング場は2階です。車いすでの参加者も2人います。社員の方に相談をしてみると、2人を運んでくれることになりました。屈強な（そうでもない人も）若者3人、車いすに乗ったままの2人を2階まで運んでくれ、無事にゲームが開始されました。

昨年は1ゲームだけで不満が残った記憶があり、今年はたっぷり2ゲームを楽しみました。4人ずつ3チームに分かれました。元気な男性4人のチーム。若者2人と熟女？2人のチーム。車いすのまどかさんを中心に連携プレーの素晴らしいチームと、それぞれ個性のあるチーム編成で、大声で笑い合い、本当に楽しい時間を過ごしました。



ボッチャ大会

期日：2024年9月1日（日） 場所 ふれあいセンター「ながみね」

今回のボッチャ大会は、茨城県作業療法士会（土浦医療圏）の皆さんの支援をいただいて実施しました。会員への案内文書作成、当日までの計画や準備、そして当日の会場作成から運営まで、ほぼ全てを療法士会の皆さんに行っていただきました。

「ながみね」の広い多目的室にはBGMが流れ、私たちが集まるころには、コートや準備もすっかりできていました。全員集合して簡単な自己紹介をし合い、競技の説明も聞きました。

当事者一人一人に支援者がついてくださったので、家族はおしゃべりをしながらゆっくり見守ることができました。当事者の中には、ボッチャの県代表にもなった「石崎元啓さん」も参加していました。他の当事者や家族の皆さんも回を重ねることによりかなり上達していましたが、元啓さんの技術は格別で、彼が投げるたびに歓声が起こりました。最後に成績発表があり、全員で記念撮影をしました。作業療法士会で用意してくださったおやつを頂きながら、今日のボッチャを振り返る様子もほほえましい感じでした。



自然を愛するカッコイイおじさま!!

桜川市 石井 省三さん

◎トリコロールのシャツが似合う石井さんとお会いしたのは、つくば市のフィットネスセンターでした。この施設には週に1回、奥様と二人で通っているそうです。とても若々しく“素敵なおじさま”という印象でした。



◇石井さんは、大学の海洋学部で海洋土木を学んだそうです。卒業後に就職した会社では建設省の仕事をしていたそうですが、その後、地元の役場の建設課で働くようになりました。自然が大好きな石井さんは、知り合いの方に誘われて「日本野鳥の会」に入りました。やがて、約1000名を擁する野鳥の会の茨城支部長を務めるまでになりました。そして、探鳥会やいろいろな自然保護活動等を数多く実施してきたそうです。

◇68歳の時に脳出血で倒れ、高次脳機能障害が残りました。ご家族や支援者の力を借りながらリハビリに励み、「野鳥の会」の集まりにもまた参加できるようにもなりました。右の写真は近くの小学校で講演をした時のお礼に小学生からいただいた文集だそうです。表紙には「ありがとう、石井先生」と、書いてあります。



◇週に1回通っているフィットネスクラブでは、トレーナーの方がついてリハビリを兼ねたサーキットトレーニングをやっています。その中でも1番楽しみにしているのは「ボクササイズ」とのこと。以前キックボクシングをやっていた石井さんは、若い先生を相手に15分間たっぷり汗を流すと、終わった後はとてもスッキリするそうです。1番のストレス発散でもあるそうです。先生を相手に打つ石井さんのパンチはとても鋭いものがありました。



石井さんと野鳥の話をしていて、とても心に残った言葉がありました。それは「野鳥の会の活動で大切なことは、鳥の名前を覚える事ではなく、鳥のいる自然の中に自分の身を置いて、鳥と共通の時間を過ごすことです。」というものです。

私たち家族会でも、石井さんのお話を聞きながら、一度自然の中の散策をしてみたいと思いました。

地域支援拠点病院

今年度新たに2つの病院が地域支援拠点病院として加わりましたので、ご紹介します。

白十字総合病院（鹿行医療圏）

住所 神栖市賀2148

電話 0299-92-3311

- ◇ 白十字総合病院は、市の中心街から少し入った閑静な場所にありました。周囲には、同じ母体となる「白十字会」が運営する保育園や看護専門学校、老人に関する施設なども見られました。



関 優治さん

池宮 毅さん

お話は、企画課課長の池宮毅さんと主任作業療法士の関優治さんに伺いました。高次脳機能障害については、関さんが中心になって活動をしているとのことでした。

- ◇ 白十字総合病院は、昭和10年に結核の療養所としてスタートしました。その後、組織や名称の変更などを経て「鹿島白十字病院」として現在の地に移り、昭和61年に白十字総合病院に名称が変わりました。

病院の理念は、「キリスト精神を基に、その時代に最も必要とされている社会福祉事業を積極的に展開し、地域社会が求める福祉と医療を推進する」というものです。これは地域連携の核となる支援拠点病院に正に相応しい理念だと思います。

- ◇ 脳神経外科的な疾患については、阿見町の東京医大茨城医療センターとの連携がとても密にできているので、緊急性があり重症度が高い患者さんは、すぐに転院搬送できる体制をとっているとのことでした。鹿行医療圏における医師数は全国でもワーストの一つとのことで、医師の確保が大きな課題だそうです。

- ◎ 拠点病院としての指定を受けてから関さんは、地域のクリニックや事業所などを訪問し、高次脳機能障害者支援に関する啓蒙活動を行っています。それには、支援センターとの連携も欠かせません。

7月には社協主催の「地域ネットワーク勉強会」で、「支援センターと白十字総合病院の取り組み」をテーマに講話をされたそうです。最近では、高次脳機能障害がテレビドラマにも取り上げられるなど、少しずつ認知されるようになってきたせいか参加者もかなり多かったとのことで、関心の高さが伺われました。

また、拠点病院に指定されたことで、相談に訪れる方も出てきました。これからは、支援者や市民の身近な相談窓口として白十字総合病院が活用され、そのなかでの池宮さんや関さんたちの活躍に私たちも大いに期待したいと思います。

地域支援拠点病院

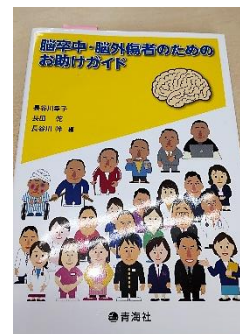
古河総合病院（県西医療圏）

住所 古河市鴻巣 1555

電話 0280-47-1010



- ◇ 古河総合病院は、桃の花で有名な「古河公方公園」の近くにありました。待ち合わせをしたのは午前中の診察の時間帯で、待合室はごった返していました。私たちがお話を伺った宮脇健（たけし）さんは、副看護部長としてたくさんの看護師さんたちを指導するお立場で、お忙しいようでした。
- ◇ 宮脇さんは、リハビリ認定看護師の資格もお持ちで、2015年のリハビリ病棟の立ち上げ時からこの病棟にかかわっておられるとのことでした。専門のリハビリに関してはもちろん、高次脳機能障害に関してもかなり詳しく研究しておられ、「高次脳機能障害の場合、若い当事者ほど家族や周囲の方の理解が必要」と、強く感じているとのことでした。「高次脳機能障害の方は、社会復帰してからが問題です。家族の理解は当然ですが、施設や職場での理解も大切になる」と話されていて、宮脇さん自ら、説明に出かけることもあるそうです。
- ◇ 宮脇さんは、お忙しい看護師の仕事の傍ら、「日本脳損傷者ケアリングコミュニティ学会」にも入会し、活動をされているとのことでした。その学会を構成する方々で出版した書籍「脳卒中・脳外傷者のためのお助けガイド」の中に、宮脇さんも執筆されているとのことでした。高次脳機能障害については、医療者でさえ分からない人がまだ沢山いるのでそのような方にも手に取っていただきたいとのことでした。



◎古河総合病院のリハビリ病棟は40床で、常に満床の状態だそうです。内訳としては脳血管疾患の方が3割、交通事故等の整形外科疾患の方が7割で、その方々の多くに高次脳機能障害が残ることになります。そんな中で、地域支援拠点病院の役割が大きくなります。宮脇さんたちは2か月に1回、支援センターの職員の方と一緒に、就労支援施設や事業所を回り始めました。また、今後は「勉強会」なども企画して、医療者や支援者の方々への普及・啓発活動も進めていく予定だそうです。さらに、身近なところでは、院内のスタッフの方々に向けての勉強会も考えているとのことでした。

高次脳機能障害を周囲の方々に理解してもらうために何ができるかを常に考え、奮闘する宮脇さんの様子がひしひしと伝わってきた今回の取材でした。

当事者会

当事者会は、早くも 23 回目を迎えました。
私は司会進行役として、参加者の皆さまと親交を深めながら、場を作り続けられることに大きな喜びを感じています。会が重なるにつれて、参加者同士の絆や信頼関係が深まり、日常の話題から深い話題まで幅広く語り合う様子が見受けられます。お互いの経験談や思いを共感・共有することで、「自分だけではない」と安心できる環境が整いつつあるように感じています。



言語聴覚士の加藤先生や高次脳機能障害支援センターの高橋さん、高松さん、参加者のサポーターさんなどのご支援に加え、最近では臨床心理士の笹島先生も会に参加してくださるようになりました。私は司会進行担当として今後の当事者会を模索中でしたが、このタイミングで笹島先生にご指導・ご助言をいただけることで、多くのことを学び、大きな支えとなりました。これからも専門職の皆様と共に、参加者が安心して自分の気持ちを話せる場を作り続けたいと思います。いつもさりげなくサポートしてくださる専門職の皆様に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

こうした交流を通じて、参加者の皆さまが少しでも心の負担が軽くなることが私の願いです。さらに、このような当事者会や家族会が県南だけでなく、県央や県北でも開催できることを強く願っています。多くの当事者やそのご家族が負担なく参加できる場が増えることが私の願いです。情報交換や感情の共有を通じて孤独感を和らげ、共感を得ることができる場所は、参加者にとって非常に大切な空間です。

経験を通じて、「当事者会」という場所の重要性を再確認しました。これからも、より多くの当事者の皆さまが参加し、心の支えを得られ、共に成長していける会となるように努めてまいります。（飛田）

高次脳機能障害支援センター(新任職員紹介)

田中 陽子

今年度 5 月より高次脳機能障害支援センターの会計年度職員として勤務させて頂く事になりました田中陽子と申します。前職は営業事務 3 年半、小学校の特別支援員 9 年間、中学校給食補助員 2 年半、専業主婦・育児約 9 年、建設業経理総務事務 9 年間、と多種多様な仕事を経験してきました。今思うのは、誰かの為に役に立つ仕事がしたい！ということです。微力ではありますが、たくさん勉強して、たくさん経験を積ませて頂き、皆様の役に立てる人を目指して日々精進していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

お知らせ

今後の行事予定（10月～令和7年2月）

◇鹿行地区交流室	★11月27日(水)	★1月22日(水)
◇県南地区交流室	★12月13日(金)	★2月14日(金)
◇県央地区交流室	★11月8日(金)	★1月10日(金)
◇当事者会	★11月24日(日)	★1月未定(日)
◇役員会	★10月15日(火)	★12月17日(火)
◇バス旅行	★10月27日(日)	



役員会報告

- 6月18日(火) (1) 各集会、交流室、当事者会等についての報告
(2) 令和6年度総会の感想
(3) 会費の納入状況について
- 7月16日(火) (1) 各集会、交流室、当事者会等についての報告
(2) リハビリ講習会について
- 8月20日(火) (1) 交流室、当事者会等についての報告
(2) 作業療法士会ボッチャ大会、バス旅行について
(3) 県福祉課・支援センターとの懇談会について

交流室からの報告

◇鹿行地区	7月	相談者1名	会員3名	社協1名	支援セ（高松 CN）
	9月	相談者1名	会員4名		
◇県央地区	7月	相談者1組	会員5名	支援セ（浅野 CN）	
	9月	相談者2組	会員6名	支援セ（浅野 CN）	茨城新聞記者
◇県南地区	4月	相談者2組	会員6名	支援セ（高橋副）	
	5月	相談者1組	会員6名	支援セ（高橋副）	（田中 CN）
	6月	相談者4組	会員5名	支援セ（高橋副）	
	8月	相談者1名	会員6名	支援セ（高橋副）	
		事業所1名、市議員1名			

編集後記

最近のテレビ番組で「高次脳機能障害」が2週にわたって取り上げられました。「まだまだ」とは言いながらも、かなり知られてきたとも思います。当会も20周年を迎えたわけですが、20年前に「ゼロ」から立ち上げた方々のご苦勞を考えると、頭の下がる思いです。私などは軌道に乗った状態で入会し、お仲間に加わったわけですが、居心地の良い人間関係の中でいつの間にか10年が経ちました。高次脳機能障害は中途障害であるがゆえに、なかなか受け入れられずにいるご家族の方も多そうです。そんな方々に家族会の存在を知って頂けるようこれからも頑張ります。（石）